



# 『絵巻物による日本常民生活絵引』 マルチ言語版編纂における問題

Problems in the Compilation of the Multilingual Version of  
“Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan”



君 康道 (東京大学大学院総合文化研究科 専任講師 / 共同研究員) KIMI Yasumichi

## 1 はじめに

神奈川県立21世紀COEプログラムも4年目が終わろうとし、いずれの課題も大詰めの時期を迎えている。私が関わらせて頂いている『絵巻物による日本常民生活絵引』(以下『絵引』と略す)マルチ言語版編纂の課題も、いよいよ第一冊目の刊行に向けて現在その詰めの作業を日々行っているところであり、本誌が出る頃とほぼ時期を同じくして、この『絵引』マルチ言語版も世に問われることになるのではないかと思う。

2003年の本COEプログラム開始から丸4年、『絵引』全5巻のうちわずか1巻を編纂するためにこれだけの時間がかかっていることに対し、厳しいご意見やお叱りがあることは事実である。しかし逆に考えれば、それだけ時間のかかる作業が我々に課せられている、ということもまた事実である。特に翻訳者に翻訳して頂いた文章の校閲作業が予想以上に困難を極め、作業の半分以上はそこで直面した様々な問題に対処するために費やされた、といっても過言ではない。それではいったいどのような問題が挙がっていたか、ここではその一端をご紹介してみたいと思う。なお課題グループメンバー全員が関わっている校閲作業はマルチ言語版の中心となる英語訳についてのみであり、本稿も英語訳に関わるものであることをあらかじめお断りしておく。

## 2 編纂作業の進め方

編纂にあたっては、『絵引』マルチ言語版の英語訳を課題グループメンバーのジョン・ポチャラリ氏を中心として、大学院歴史民俗資料科学研究科在籍の留学生や他大学大学院の留学生など計5名の方々に分担をして依頼をし、訳出されてきた文章を課題グループメンバー(前田禎彦、ポチャラリ、鈴木彰、金貞我、君)全員で校閲し、そこで内容の確認・検討や訳語の統一といった作業を行ってきた。自明のことではあるが、我々が作業を進めているのは澁澤敬三編の「オリジナル」の『絵引』をマルチ言語版として編纂することであり、我々の「新た」な『絵

引』をマルチ言語版として編纂することではない。その点に注意するため、翻訳及び校閲作業にあたっては、以下の3点を「原則」として掲げた。

出来るだけ原文に即して忠実に翻訳する。

絵引の絵を基本としながら、そこに描かれたものに妥当な訳語を与える。

極力日本語をそのまま残さないよう、原文を適当な訳語に置き換える。

しかし原則というものはなかなかその通りにいかないのが常で、この『絵引』マルチ言語版として例外ではなく、「原則に当てはめて考える」ということには大変苦慮した場面に実際何度も直面した。

## 3 「あみ衣」は今でも一般的か?

例えばオリジナルの『絵引』第2巻「196 あみ衣」に、以下のような記述がある。英語訳も下に併記してみよう。

「右端は一遍である。法衣の上に着ているのはあみ衣である。(中略)そしてこのような衣類はいまも新潟県中魚沼郡の山中、秋成地方にのこっており、アングインといっている。(後略)」(新版p.78)

Ippen is to the far right of the picture, wearing *amiginu* over his priestly robes. (中略) This kind of attire still exists in the mountain area called Akinari in Naka-uonuma County, Niigata Prefecture, where it is called *angin*. (後略)

校閲では、こうした原文と訳文との合致を検討することが、第一の作業となる。上記の場合、本文と訳文の間の記述内容に相違はないと思われる。しかしここで問題となるのは、その記述内容それ自体についてである。この文章を一読すると、あたかも現在もこの地域では「あみ衣」が一般的に用いられているような印象を受けかねない。果たしてこのままで良いのだろうか?

『絵引』『196 あみ衣』の項。本文、訳文、そして絵と、それぞれを照らし合わせながら校閲作業は進められる。わずか1項の検討に数時間費やさなければならないこともしばしばであった。

#### 4 原文に手を加えるべきか...

『絵引』は最初の刊行が1964年(角川書店刊) 現在も版を重ねている「新版」(平凡社刊)が1984年と、いずれも世に出てからかなりの年月を経ており、そのため文章の中には現代にも果たして通用するかどうか疑問に思う点も少なくなく、このあみ衣の例もそのひとつである。こうした文章をマルチ言語版ではどのように対処するか、校閲作業中にメンバーの間で多くの議論が交わされた。考えられる方策は主として二つ、内容に疑問のある箇所もそのまま訳出する、疑問のある箇所は加筆修正を行う、いずれかである。本来ならば学術資料として記述内容に誤りが認められることは決して許されることなく、正しい情報を伝えるために、この場合も の案を採用してそれなりの修正が加えられるべき、ということでは当然誰も考えよう。しかし先にも述べた通り、我々の作業は「オリジナルの『絵引』のマルチ言語版を編纂すること」である。一語二語程度の修正ならばともかく、この程度の修正を行う場合には、数行に渡っての文章の変更が必要となろう。そのような変更を加えた場合に我々が恐れたことは、修正箇所に我々の「意思」が入り込み、そこから文脈そのものが本来の執筆者の意図から外れていき、その結果「別物」の『絵引』が「オリジナル」の『絵引』のマルチ言語版になりすまして世に出てしまう、ということであった。こうなると本来我々が遂行すべき課題とは大きく異なってしまうことになる。そのように考えるとやはり の案を採用し、内容には手を加えずにそのまま訳出するのが無難ということになってくるが、その場合は結局のところ「情報内容の正確さ」という問題点にまた舞い戻ってしまうのである。

#### 5 「『絵引』の方法の紹介する」ということ

このように、 、 いずれの方策をとっても一長一短がある。しかしもう一度原点に戻って考えてみると、『絵引』マルチ言語版編纂は、『絵引』が本来持つ「内容」や「方法」そのものを広く世界に紹介する、ということが主目的であった。「内容」とともに世界に類をみない『絵引』という「方法」は、『絵引』がもつ独自性の何者でもなく、ここにこそマルチ言語版を編纂する意味がある。結局このことを根拠として、最終的には「原則」に従って加筆修正は行わず、この文章をそのまま訳す」という結論に落ち着いた。当然この場合は「情報内容の正確さ」についての問題が生じ、マルチ言語版の利用者が記述内容を鵜呑みにして誤解を招く恐れは十分に考えられる。そのよ



うな過ちを引き起こさないためにも、刊行の際には上述したような編纂目的や、「本文を忠実に翻訳したがために、多少の誤りや現代にそぐわない記述内容が含まれている」ことを序文や凡例などに明記して、十分注意を促すような対策を講じることとした。

#### 6 むすびにかえて

以上は編纂過程でぶつかった諸問題のほんの一例に過ぎない。今回は紙面の都合で割愛せざるを得なかったが、先に挙げた翻訳・校閲の原則の 、 に関連する訳語の問題などには無数とも思えるほどに直面し、我々の頭を悩ませ続けた。正直こうした問題を「それほど大した問題ではないのではないか」と考えたこともあった。しかしCOEプログラムの一環である以上、そうした考えはやはり「ご法度」である。第一冊目の刊行後も次巻の刊行に向けて、最終年度も我々の作業は続けられるが、早ければその作業中にも第一冊目の批評が少なからず耳に入って来るかもしれない。果たして我々の試みがどこまで通用するのか、少し戦々恐々とした心持ちである。しかしいかなる批判を仰ぐことになるうとも、気を緩めることなく出来るだけ大きな成果の結実に向けて、事業終了まで作業に従事していかなければと考えている。

注)本稿は2006年度COEプログラム第4回全体研究会(11月10日)での報告の一部を基にして纏めたものである。また文中の英語訳は、翻訳に携わって頂いた方々のうちの一人、中井真木氏(東京大学大学院総合文化研究科博士課程)が元訳を担当されたものである。